

日本ロータリー再建の頃⁽¹⁾

1972年1月定年でR I 事務総長の職を去ったミーンズ氏は、19年間国際ロータリーの大黒柱として、文字通りロータリーに献身、その残した業績は余りにも大きい。なかでも私達がいままで忘れ得ぬこと、そして忘れてはならないことがある。それは氏が当時のR I 会長アンガス・ミッチェル氏(豪州)とともに、戦後日本ロータリー再建の大恩人であるということだ。今エバンストンで余生を送る氏にお願いして、日本ロータリー再建当時の推移を執筆していただいた。古いロータリアンにとっては往時の苦勞をしのぶつかしい追想のひとつときとなろう。そして新しいロータリアンも、必ずや未来を目指す何物かを得られることと信じる。7回にわたって掲載の予定。



前R I 事務総長

ジョージ R. ミーンズ

よくぞここまで

全世界において、日本語を母国語とするロータリアンの数は、英語を除けば他のどの国のロータリアンよりも多い。

日本のロータリーの地区大会または地区協議会の出席率は、他のどの国のそれよりも高い。

ロータリー財団に対するロータリアン1人当りの寄付額は日本が最高である。

ロータリー財団に対して、100万ドルを超える寄付をした地区は、全世界で2地区しかない。その2地区とも日本のだ。

1976年のニュー・オーリンズ国際大会に米国は別として、最も多数のロータリアンが参加した国は日本である。

1975～76年度において、他のどの国のロータリークラブよりも会員数を増やしたのは日本のクラブである。

日本のロータリアンがなすとげた記録は他にもあげられよう。ロータリーに対する日本人の熱意がこのように高まり拡がったのは、1949年この国にロータリークラブが再

建されて以来僅々この25年間のことであると考えられる。

この国のロータリーの現在の発展ぶりはまことに著しい。その発展ぶりは、日本のロータリーを知るすべての人に大きな誇りと満足感を与えている。だがこの発展の時間の枠を1949年以降に限るのは正確でない。日本にロータリーの種子が蒔かれたのは、それより更に30年も前のことだ。したがってこの発展に対して妥当な評価を下すには、戦後再建なった時点からはもとより、日本ロータリー草創時代からの広汎な活動ぶりをも振り返って視る必要がある。

草創の頃

1918年8月、時のロータリークラブ国際連合会(国際ロータリーの前身)事務総長チェスレー R. ペリーは、東京にロータリークラブ結成の機運を醸成すべく、この大都會在住の複数のしかるべき人物と交通を始めた。その翌年の末に東京の銀行家米山梅吉氏が米国に來たり、そして1920年の元旦を、テキサス州ダラス・ロータリークラブの会員であった福島喜三次氏の宅で迎え

1969年6月 政府より、日本のロータリー再建と国際理解増進につくした功により、勲3等旭日章を贈られる。左よりミーンズ氏夫人、ミーンズ氏、愛知外相(当時)、右端は東京RC粟原会長(当時)

た。米山氏はこの時福島氏から初めてロータリーというものについて、色々教えられ、大いに感ずるものがあったといわれる。両人は1920年の初期に相前後して日本に帰り、ロータリークラブ結成の計画に着手した。

1920年の8月、米山氏はしかるべき人物数人を招いて、ロータリーの基本方針と計画を説明する

会合を開いた。東京にロータリークラブを結成しようというアイディアに、出席者は大いに共鳴し、9月には設立準備会が開かれる運びとなった。そして早くもその翌月20日すなわち、1920年10月20日に正式な創立総会が開かれ、米山氏が東京ロータリークラブ初代会長に、そして福島喜三次氏が初代幹事に選ばれたのである。会員数24名で発足した同クラブはこのあと直ちにロータリークラブ国際連合会に加盟を申請した。

この申請を受けたロータリークラブ国際連合会は、東京クラブと連絡を重ね、同クラブが組織を十分に整備し、国際連合会の活発かつ健全なメンバーとなり得るよう指導した。そして1921年4月1日、同連合会は東京ロータリークラブの加盟を承認したのである。この日から日本のロータリーの発展が始まった。花とひらく時代を目指して活動を開始したのである。

ロータリークラブは週1回必ず例会を開く



規定になっている。だが東京ロータリークラブ創立当初は会合は月に1度しか行なわれていなかった。米山氏はこの点について会員の注意を喚起し、会員同士更にはまた全世界のロータリークラブとの親睦と友好を一層深めるために、以後毎週1回は例会を開くよう提案した。この提案は全員の賛同するところとなり、ロータリークラブ国際連合会の規則に従って毎週1回きちんと例会を開くこととなった。

例会がひらかれるたびに、ほとんど毎回のように入会が続いた。新会員は職業分類の原則に従って選ばれた人々ばかりで、クラブの強化発展に役立った。

初代幹事の福島喜三次氏は東京クラブの加盟承認以前の1921年2月に転勤のため退会していた。大阪転勤となった氏は、ロータリーに対する熱意を新任の地に持っていき、大阪ロータリークラブ結成のため、市内の有力な実業家、専門職業人と懇談を重



米山 梅吉氏
ねていた。その努力が実
ってまもなく大阪ロータ
リークラブが結成され、
1923年2月10日に国際ロ
ーターリーに加盟を認めら
れた（ロータリークラブ国際連合会は当時
すでに国際ロータリーと改称していた）。
福島氏は大阪ロータリークラブでも初代幹
事を務めた。

関東大震災が一つの転機

さて、1923年9月1日あの関東大震災が起
きたとき、全世界のロータリークラブは一
斉に援助の手を差しのべた。その援助活動
はまことに素早く、9月4日にはすでに海
外諸ロータリークラブからの義捐金や救援
物資が東京に到着し始めたほどである。国
際ロータリーを通じて、東京に義捐金・救
援物資を贈ったクラブは、米国が335クラ
ブ、カナダが39クラブ、その他19ヵ国から
合計92クラブにのぼる。赤十字を通じて援
助を提供したクラブも多数あり、また国際
ロータリー自体も25,000ドルを救援資金と
して東京ロータリークラブに贈っている。
全世界のロータリーがこのように大規模か
つ迅速な救援活動を展開したことは、日本
のロータリアンに深い感銘を与え、彼等自
身善意と理解を行動で示そうと献身する人
々の世界的連帯の一環であることを深く認
識するに至ったのである。

米山梅吉氏は海外ロータリーからの援助
に関して東京クラブに報告した際「ロータ
リー精神は地震と火災のなかで生き生きと
脈動し、輝やいたのである」とのべ「日本
のロータリアンは更に活動に献身し、この
大災害にあたって海外のロータリアンから

受けた好意に応えなければならない」との
べている。

1925年には名古屋、神戸、京都に相次いで
ロータリークラブが結成された。そのあと
まもなくロータリーに対する関心は本州か
ら日本の他の主要諸島に拡がり、北海道、
九州そして四国にもクラブが結成されるに
至った。かくてロータリーは日本に着実に
根をおろし、新クラブの結成ならびにロー
タリーの諸活動は一段と推進されていっ
た。1928年には初めて地区が設定され、日
本の全ロータリークラブは一つの地区第70
地区に編成され、米山梅吉氏が地区ガバネ
ーに就任した。そして1939年にはクラブ数
の拡大にともなって3地区（第70地区、第
71地区、第72地区）に分割されている。

日本のロータリーのこのような強化発展は
国際的に反映され、国際ロータリーの諸委
員会のメンバーあるいは国際ロータリー理
事として日本のロータリアンが国際舞台に
登場するに至った。たとえば米山梅吉氏が
1926～27年度R I 理事、宮岡恒次郎氏が19
34～35年度R I 理事として活躍している。

国際ロータリー離脱

1920年代から30年代にかけてロータリーの
拡大と期を一にして、諸大陸間の電話通信、
ラジオ、航空機による旅行、そして航空便
などの世界的な交流連絡の手段に大きな発
展がみられた。世界諸国民の間の友好と理
解の増進に大きく貢献したこの連絡手段の
発展は、逆にまた国家主義的な傾向を強め
る活動を世界各地で刺激することになる。
世界の全大陸でこのような活動傾向を強め

る国がみられ、日本もその一つであった。

1930年代の半ばに、日本のある団体が「ロータリークラブは非愛国的組織であり、即時解散すべきである」との決議を行なった。当時日本国内のロータリークラブ数は35クラブ、会員数は1,500名強であった。これらロータリアンはみな母国日本に忠誠であり、愛国心豊かな人々ばかりであった。そして彼等はまたロータリーの奉仕の理想の実践と拡大のために献身していた。だが国内におけるこのような圧力の増大は、次第に彼等の活動を困難なものとしていったのである。

1938～39年度の初期に、日本のある地区のロータリアンが国際ロータリー定款の範囲で、日本を単位とするロータリー組織の設定を提案した。その種の地域的運営を認める定款の条項が1920年代に数年間存続していたことは事実であったが、1927年の国際大会で廃止されていたのである。この事実気付いた日本のロータリアンはこの提案を撤回した。その代りにロータリーが日本国内で有益な活動を継続強化できるような方法を研究して欲しい旨を強く要望したのである。だが結果的には、国際的な連携をもつ組織の活動を制限する日本政府の方針によって、日本のロータリークラブは国際ロータリーを脱退するのやむなきに至った。当時の国際ロータリーの記録をみると「1940年12月31日以後日本において活動中のロータリークラブは皆無」と記してある。

七曜倶楽部で存続（1940～48年）

1940年日本のロータリークラブがR Iを脱

退したことは、R Iにとっ
てはもちろん、脱退した日本の各クラブにとっても辛く悲しい出来事であった。脱退はそれらクラブが個々にあるいは共同で長い間様々な手段をつくして回避の努力をしたあとでやむなくとられた措置であった。であるからして、最終的にクラブの解散が不可避であると分ったとき、それまで培ってきた親睦と友情そして活動を今後とも保ち続けたいとする希望と決意が一樣に表明されたのである。



福島喜三次氏

1940年9月11日東京ロータリークラブの会合で、クラブの解散を宣言したあと、当時のクラブ会長中山龍次氏は「今後新しい組織ができるまで、東京ロータリークラブは東京水曜倶楽部の名称で毎週例会を開く」と発表し、そして更に「会員は従来と同じように忠実に出席し、全委員会はいままで通り活動を続けて欲しい」と要望したのである。当時の北島亘幹事はこの日の例会記録の最後に「ロータリー精神万歳」と書き留めた。（以下次号）

ミーンズ氏略歴 1935年R I事務局入局、1953年事務総長就任、1972年1月定年退職、1932年米国イリノイ州ブルーミントンRC入会、元同クラブ副会長、現在エバンストンRC会員、東京、大阪、ソウル、シドニー、ケープタウンその他RC名誉会員。

R I入局以前は、地図の編集刊行に従事。アメリカ地理協会会友、元米国海軍中佐。フランス政府より、レジョン・ド・ヌール勲章、日本政府より勲3等旭日章、その他チリ、イタリー政府より叙勲。現在米国イリノイ州エバンストン在住。現住所は1501 Hinman Avenue, Evanston, Ill. 60201, U.S.A.

日本ロータリー再建の頃(2)

Japan's Return to Rotary

by George R. Means, Past General Secretary, Rotary International, 1953-1972

前R I事務総長 ジョージ R. ミーンズ

七曜倶楽部の健闘

東京水曜倶楽部は孤独ではなかった。それまでのロータリークラブの全部というわけではないが、殆どどのクラブが従来の例会日と同じ日に会合を開くことにしたのである。クラブの名称は例会開催日の曜日を冠したものがほとんどであった。したがってこれらクラブは一般に七曜倶楽部（注 個別には地名を冠した会あるいは倶楽部もあった）と総称された。各倶楽部ともロータリークラブのときと同じ役員構成および委員会組織を維持し、従来と同様の活動を続けた。そして殊に青少年活動を熱心に推進し、恵まれない子供達や孤児のための施設を作ることに努力している。

1940年代の情勢のもとでは、大きな予算を要する活動ができなかったのは当然であろう。その代りに彼等は個人的努力を惜しまず、直接的奉仕を積極的行なったのである。

七曜倶楽部はそれぞれ単独に組織され、活動も単独に行なっていたが、全体的にはやはりある程度の連携を保ちつつ動いていた。他のクラブがどのような活動をしているかはお互に大体知っていた。これは主と

前月号では、軍部の圧力で日本のロータリーがR Iを脱退し、ロータリークラブを解散したところまで紹介した。今月号では七曜倶楽部の活動から始めて、ミーンズ氏の神戸水曜会訪問までの推移を綴る。

して東京ロータリークラブの元会長で、東京水曜倶楽部のメンバーである小松隆氏の努力のおかげである。それだけではない、「超我の奉仕—最も良く奉仕する者、最も多く報われる」の精神を生かし広めようとする小松氏の熱意は、1940年代に三つの七曜倶楽部を誕生させた。この三つの倶楽部は元のロータリークラブとは全く関係のない、新しい倶楽部である。

国際ロータリーの役員は、日本の元ロータリアンあるいは七曜倶楽部ともなんら直接の接触はもたなかった。それにもかかわらず、この七曜倶楽部の存在と活動についての情報は時折国際ロータリー事務局に届いていた。この種の情報は、従来日本にロータリークラブを復活するとき役に立つものとして、同事務局を力づけた。

この希望は大戦終了後一段と強まった。七曜倶楽部が「ロータリー復帰協議会」を結成したとの報告が国際ロータリーにもたらされたからである。

1948年の8月、私はR I事務局次長として1年間のインド駐在を終え、米国イリノイ州シカゴのR I事務局（本部）に帰任の準備をしていた。七曜倶楽部が「ロータリー

ミーンス氏とマーサ夫人（エバンストンの自宅書斎で）。なおミーンス氏はこのほど1978年東京国際大会委員に任命された。同大会委員会が今月11～12日東京で開催されるので、同氏も出席のため夫人同伴で来日する。



復帰協議会」を結成したことがR Iの知るところとなり、そしてまた日本のロータリー復帰をできるだけ早くかつ全面的に援助したいとするR I自体の強い希望もあって、当時のR I理事会は私に対し、インドより帰国の途次日本に立寄り、以前のロータリアンの活動状況とロータリーに対する関心を非公式に視察するよう、指示してきた。

マ元帥 ロータリー再建に好意

1948年8月28日(土)、東京に着いた私はまずダグラス・マッカーサー元帥と会いたいと思い、翌日曜日に八方手をつくした。この結果月曜日に元帥が私と会ってくれることになった。この会見で私は元帥に「今回の訪日は非公式なものであるが、R I理事会が日本のロータリーの再建を希望した場合、総司令部がどのような態度をとるか伺いたい」と率直に切り出した。

ところが嬉しいことにマ元帥はロータリーのことをよく知っており「日本のロータリーの早期再建を望んでいる」との答えが返ってきたのである。話が進むうちに元帥は「日本のロータリー再建は急を要することである」と語り、そして更に「ワシントン

の政府と連絡をとって同意をとりつける」といふ。政府に出す手紙の写しを私にも送ってくれ。もし君が希望すれば、私がこの件についてどう思っているか今君に話したことを、そのまま政府に伝えてもよい。そうすればまもなく認可がおりるだろう」とまでつけ加えたのである。「元帥、私にはその“認可”という言葉が気になるのですが、政府の許可にしたがわなければならないというのであれば、ロータリーは活動できません」私があえてこう言うと、元帥は少し考えていたあと次のように語った。「ロータリーが崇高な団体であると私が考えていなかったとしたら、そして国際的にもそのような団体として知られていなかったとしたら、そしてまた日本人のためにたいして役に立たぬものであるとしたら、再建を欲しないだろう。すべてはロータリーにかかっている。君達はしかるべき立派な人物だけを集めるよう、そして彼等がロータリーの期待を裏切らない活動をするよう注意すべきだ。これはすべて君達にかかっている。私としては日本のロータリーが、あらゆる分野で国際的に活動できるようになることを望んでいる。国際ロータリーは誰かを日本に派遣して状況を視察調査させ



小松 隆氏

かね。他になんでも必要なことがあれば援助するよ」と言ってくれた。

マ元帥が日本でのロータリー再建についてこのように深い関心と熱意を持っていてくれたことが分って私は大いに自信をつけた。そしてロータリーに復帰したいとする日本人の希望が強く真剣なものであることがはっきりすれば、RI理事会は、復帰に必要な援助を好意的に配慮してくれるだろうとの確信を持ったのである。

小松隆氏と再会

その翌日私は小松隆氏と連絡をとった。小松氏とは日本でロータリーが活動していた時分からの知り合いである。氏は七曜倶楽部の維持強化そしてロータリー復帰協議会の積極的推進者の一人であったから、是非とも氏に会いたかったのである。小松氏との会合は丸ビルの757号室にある東京水曜倶楽部の事務所でおこなわれた。ここはもと東京ロータリークラブの事務所（現存）であったところである。事務所に入ると、すぐポール・ハリスの肖像画が目に入った。1937年版職業分類概要、1938年版手続要覧、それからロータリアン誌をまとめた数冊のファイル、そして1948年7月号と8月号のロータリアン誌もあった。ロータリーマーク付きの木製ケース入りの古めかしい掛時計もあり、テーブルにもロータリーマーク入りの灰皿が置かれている。1936年の年代入りの大きな銀製トロフィがあり、そ

るべきである」と。「私
がその視察と調査の任に
当たらないけませんか」
とたずねると「もちろん
結構だよ。君に時間があ
ればね」と答え、「まず
行ってみて自分の目で見

てみなさい。通訳が必要

れには「国際理解と友好のための共通の希望に結ばれて……米国ニューヨーク州ビンガムトン・ロータリークラブより、日本のロータリアンへ」と刻まれていた。この品をみて私はロータリー精神が日本で生き続けていることを感じとったのである。

小松氏は大分読み込んだらしい1948年8月号ロータリアン誌（ハワイの友人から氏に送られた）を開き、ある箇所を指さしたそこには「中央アジア事務局担当のジョージ R. ミーンズ事務次長特別任務のため、本部に帰任の予定」と出ていた。そして氏は「これを読んで、私達はあなたが来るのを心待ちにしていたんですよ」と言った。

この会合は火曜の午後に持たれたわけだが、その翌日は東京水曜倶楽部の例会日にあたるので、それに出席したい、他の七曜倶楽部もたずねてみたいと言うと、氏はとても喜んで「結構ですね。滞在中毎日七曜倶楽部をまわってみたらどうですか」と答えた。氏の乗り気をみて、私もすぐ「そうですね。今週の残りの期間に1日1クラブずつたずねてみましょうか」と言った。

小松氏は記録を少し調べてみてから、「じゃ明日は東京水曜倶楽部に行きましょう。神戸の例会は木曜、京都は水曜、大阪は金曜日になっていますから、東京と神戸、大阪、京都それから他にも少しまわれるでしょう。土曜日は七曜倶楽部の代表を東京に集めることができれば、会って下さいますか」と言う。もちろん喜んで同意した。こうして翌日に始まる数日間のスケジュールが組まれた。

さて、その翌日東京水曜倶楽部の例会にでてみると、会員が丸い台皿型の大きなメダル・バッジを着けている。バッジの外端には糊付したと思われる幅 $\frac{3}{4}$ インチ程度の紫色の紙テープの輪がついている。その紙テープの内側には着用者の氏名と職業分類が印刷されていた。紫色のその紙テープの

輪が東京ロータリークラブあるいは国際ロータリーまたはその二つを併せて象徴していることは明かである。12時10分会長が槌で鐘を鳴らすと、出席者全員が持参の風呂敷を開いて、御飯と魚と漬物の弁当を食べ始めた。小松氏だけは私も食べられるようにと、サンドウィッチを持ってきていた。12時35分になると全員が立上った。そして使い込んだ歌集をみながら「Rotary, My Rotary」「R-O-T-A-R-Y」を歌った。いつもこれらの歌をこういう具合に歌っていることが出席者の様子から明かにうかがわれる。誕生日にあたる人々のためのバースデー・テーブルも設けられており、他の七曜倶楽部からのビジター紹介も行なわれている。例会の運営方法と雰囲気は全くロータリーらしいものであり、私を非常に気楽にさせてくれた。この日の例会（1948年9月1日）は関東大震災の25周年記念日にあたっていたので、全員が立上って黙祷し、それから当時全世界のロータリーから寄せられた援助に対し感謝の念を新たにした。

当日の例会スピーチは「平和と原子力」であったが、講演者が紹介される前に小松氏が私を全員に紹介し「ミーンズ氏の訪問の結果、ロータリーがまもなく日本に再建されることを願っています」とのべた。

日本ロータリー再建の条件

その日の晩、小松氏と私は汽車で神戸へ発った。この汽車旅行は楽しく、二人が時間を気にすることなく、色々なことについて心おきなく話し合う機会を与えてくれた。その際の話のなかで氏は「日本のロータリークラブを再建するために果さなければならない特別の条件がなにかあるか」とたずねた。これに対し私は「国際ロータリーの定款と細則は、全世界のどのロータリークラブにも公平かつ完全に適用される」と前置きし「少なくとも五つの点をはっきり認識し覚えていただく必要がある」とのべ

た。小松氏の参考のために、車中で次のようにその五つの点を紙に書いて手渡した。

(1)毎週例会を開くこと。(2)職業分類の原則を忠実に守ること。(3)地区ガバナー制度を超える、地区または地域的組織ないし管理運営体制を設けないこと。(4)米国通貨を基準にして人頭分担金を支払うこと。(5)国際ロータリーの行事、たとえば国際大会、地区大会などに積極的に参加すること。

神戸木曜会を訪問

翌朝7時40分、つまり東京を発ってからかきり12時間後に私達は神戸に着き、元ロータリアンで神戸木曜会の会長の鈴木岩蔵氏の出迎えを受ける。ホームで会ったとき鈴木氏が左手をぎこちなく襟元のあたりにつけて握りこぶしをつくっていたのに気付いた。挨拶が済んだあと、鈴木氏は「ミーンズさん、貴方が誰か案内の方と一緒に来られるのかどうかははっきりしなかったので私を見分けられるようにロータリーバッジを着けてきました。本当はまだつける資格はないんですが」と言い、襟元から手をはなしてバッジを見せてから、すぐそのバッジをはずした。私はここにもロータリー精神が日本で健在な証拠を見たのである。

神戸木曜会の例会で10分ほど英語で話をしたが、私の感じでは出席者の少なくとも8割ぐらいは、私の言ったことをよく理解してくれたと思う。そのあと小松氏が話したが、彼は私が車中で書いて渡したあの五つの点を繰返えし強調していた。

例会場は隣寸会館であったが、そのホールの壁に木曜会の出席表が掲げられていた。それはこの会の出席率がどのロータリークラブにもひけをとらない立派なものであることを示していた。週間出席率の低い会員5名が、次週の例会日の食事の際に、出席者全員に水をついでもわることになっているとのことであった。

日本ロータリー再建の頃 (7-3)

前R I事務総長 ジョージ R. ミーンズ



大阪、京都を訪問

翌日の朝早く汽車で大阪へ着くと、すぐその足で大阪金曜会の会長里見純吉氏の事務所を訪ねた。氏は元大

里見純吉氏 阪ロータリークラブの会員で1937~38年度に地区ガバナーを務めた人である。この会合には同会の幹事、会計その他の委員会の委員長も参加し、会員名簿を検討しながら、会の活動全般について詳しく報告してくれた。そのあとで彼等はこれまで毎週金曜日に1回も休むことなく、以前のロータリークラブと同じ場所、同じメンバーで例会を開き続けたことを誇らしげに話してくれた。

その日の正午に行なわれた大阪金曜会の例会で、里見会長は私を会員に紹介する際に次のような話をした「ご存知の通り、私達はロータリアンではない。私達の多くは大阪ロータリークラブの会員であった。だが大阪の人はいまでもみな私達をロータリアンと呼んでいるし、私達の会をロータリークラブと呼んでいる。本当にロータリアンとなり、大阪ロータリークラブとなる日が来るのを私達は切望している」と。神戸の時と同じように、私が話をしたあと、小松氏が例の五つの点について説明した。

その日大阪から1時間半ばかり汽車に乗っ

10月号掲載の(2)では、来日したミーンズ氏がマッカーサー元帥と会見、日本ロータリー再建の同意を得、小松隆氏とともに再建のための予備調査に着手、東京水曜会、神戸水曜会（いずれも元ロータリークラブ）の例会を訪問したところまで紹介した。

て、午後3時半に京都駅に着いた。階段の上で京都水曜会の幹事絹川清氏が迎えてくれた。氏はロータリーマークの入った赤旗と



白旗を振りながら立って、絹川清氏で「この旗をしまい込んでから使うのは今日が初めてです」と言った。実際旗はそれまできつく巻かれて仕舞ってあったので、きちんとおびない。絹川氏は私達2人と2、3人の京都水曜会のメンバーを車に案内し、その旗を2本とも車の前部に付けた。それから私達一行はホテル洛陽へ向ったのである。

その晩開かれた京都水曜会の夜間会合に出席した会員は、全員とまではいえないにしても、ほとんどが英語を話した。「この水曜会をロータリークラブにするためには何をしなければならないか」会員達は一樣にこのことを知りたがっていた。これに対し小松氏と私が、神戸と大阪でしてきたのと同じように説明をした。

9月4日（土）の朝、東京に帰着した私はその日の午後工業倶楽部で開かれた全国七曜倶楽部の代表者会合に出席した。小松氏に招かれたのである。この会合には日本の元のロータリーの指導者格の15人が出席していた。



この人々はみな、ロータリーの理想への献身ぶりもさることながら、その経歴において注目に値いする人々である。このうちの3人

小松 隆氏は1940年代の日本において「超我の奉仕——最も良く奉仕する者、最も多く報われる」とする精神を普及強化するために多大な貢献をした人々として特に注目に値いしよう。

再建日本ロータリーの3本柱

小松隆氏 物静かな人であったがそれでいてダイナミックな指導者であった。1940年代を通じ、氏は全日本の元ロータリークラブ会員に対して、ロータリアンであった当時のパターンに従って親睦を深め活動を続けていくよう激励してきた。氏は全国の七曜倶楽部の非公式な結成を促し、その結成にあたってまとめ役を果たしてきた人である。だが指導者としての氏の活動が日本の利益に反するのではないかと疑う者がでてきた。



1948年の8月に氏に会った小林雅一氏とき、私は氏が当局の監視下にあることを知った。この事情を承知のうえで、マッカーサー元帥から通訳が要るかときかれたとき、私は小松氏の名をあげたわけであるがマ元帥は小松氏をよく知っており、また氏が監視下におかれて活動を制限されていることもすっかり承知していた。それにも拘らず元帥は「一番いい人を選んだね」と言ったのである。1940年代における氏の賢明にして勇氣ある活動そして氏が私を大いに助けてくれたこと、この二つの点でロータリー全体が氏に負うところは大きなものがある。

小林雅一氏 以前の名古屋ロータリークラブのチャーターメンバーとなってから4

カ月後に、米国オハイオ州クリーブランドで開かれた1925年国際大会に出席し、演説した人である。この演説のなかで氏は次のように



手島知健氏 言っている「ロータリー活動を精力的に開始するため、私はいまバッテリーをフルに充電して帰国することができる。そして勢いよくロータリー活動を始めることができる」と。その後の氏のロータリー歴をみると、氏の“バッテリー”がその時永久充電されたことは疑いない。それから2年たらずのうちに氏は事業を東京に移し、東京ロータリークラブの会員となった。そして1930年代を通して米山梅吉氏と協力し合って活動している。小林氏は海外の友人から親しみをこめて“Kobay”と呼ばれていたが、東京ロータリークラブの幹事を数年間務め、アデッショナル・ロータリークラブを全国に結成するために熱心に活動した。1940年代の“Kobay”は東京水曜倶楽部の会員として著名であり、また七曜倶楽部運動の熱心な支持者であった。そしてロータリー復帰協議会の活動に大きな役割を果たした人である。

手島知健氏 私が初めて会ったとき氏はロータリー復帰協議会の会長であった。1933年に神戸ロータリークラブに入会した氏はその後東京に移って、東京ロータリークラブのメンバーとなった。氏はロータリー復帰協議会を構成していた全国の七曜倶楽部の動きに最も通曉していた一人である。ほとんどの七曜倶楽部を少なくとも1回は訪問しており、これら倶楽部がロータリー復帰を待ち望んでいることをよく知っていた。手島氏は各倶楽部に人望があり全面的に信頼されていた。後で詳しく書くが、もし氏の好意ある理解と具体的な協力がなければ、日本のロータリークラブ再建を手伝う私の仕事は、はるかに困難なものとな

っただらう。

さて、この土曜日の午後の七曜倶楽部代表の会合で、小松氏が私の突然の来日のためこの会合を急遽招集するに至った事情を簡単に説明し、この機会を利用して、参加者が私と直接話し合ってくれるよう要望した。小松氏はまた私と氏自身が接触を始めたいきさつをのべ、そして私の要望で過去3日間にわたり、東京、神戸、大阪、京都の七曜倶楽部の例会および特別会合に出席してきた旨を説明した。更にまたこれら倶楽部の例会では、例外なく日本のロータリー復帰を熱望する声があがったことを報告した。このあと氏はロータリー復帰協議会の会長である手島知健氏に会議の進行を求めた。あとを受けた手島氏はかつてのロータリークラブ時代に拡まった親睦と活動を継続維持するため七曜倶楽部を励ましてきた小松氏の努力と識見に深い感謝の意を表した。手島氏はまたロータリークラブの時代を全く経験することなく、新たに結成されたいくつかの七曜倶楽部のことにもふれた。そしてロータリー復帰協議会の結成が伝えられたとき全国の七曜倶楽部から多大の反応があり、1,200名の全会員が早くロータリアンとなり、全世界にわたるロータリーの偉大な奉仕と親睦の一翼をにないたいと熱望していることを伝えた。

この会議に出席した人々は、彼等自身の間であらかじめなんの打合わせも相談もしてなかったようで、全く自発的に一人ずつ立上って、各自のクラブとその会員の意向について、手島氏の発言と同じようなことをこもごも申しのべた。発言者の多くは、発言しながらも自から湧き上がってくる感動を抑えきれないようであった。私も話した。その週に訪問した4クラブで話したときよりも、更に長時間にわたって、一層詳しく

話したのである。会議中はさまざまな質問が提起され、それに対して私は自分の意見や考えはあくまで個人的なもので、国際ロータリーの公式見解ではないことを繰り返しながら、質問に答えていった。

十分に自由にお互いのもつ意見や情報を交換し合ったこの会合は2時間半続いた。会合が終ったとき、以前に長年の間熱心なロータリアンであった一人が頬に伝わる涙を拭おうともせず「ロータリアンとして埋葬されるようになるまで、長生きしたいものです」と言った。

再びマ元帥と会う

次の月曜日私は再びマッカーサー元帥を訪問した。元帥が私の関西旅行を好意的に取計らってくれたことにお礼をのべ、そして殊に小松氏を私と同伴できるようにしてくれた配慮を深謝した。この機会を利用して私はこれまでの会合で示された日本側関係者のロータリー復帰に対する関心と熱意をマ元帥に伝え、日本にロータリーが間もなく復活し、活動するようになる可能性がある旨報告した。

これを聞いた元帥は非常に喜んで、国際ロータリー理事会が、日本にクラブを結成する決定を早急に下すよう希望する、とのべた。そして「それが実現したとき、国際ロータリーの役員が訪日して、この国のロータリーが幸先よいスタートをきれるようにして欲しい。日本のロータリー復帰は感動的なものとなるだろう。このような立派な組織に復帰できるのだから」と語った。

(以下次号)

訂正 9月号掲載の「日本ロータリー再建の頃(1)」で、米山梅吉氏が1920年の元旦を米国テキサス州ダラスの福島喜三次氏宅で過したと記したが、これは1918年の誤りでした。1920年とする説もありましたが、米山氏が福島宅に残した署名によって、1918年が正しいことが明らかになります。

日本ロータリー再建の頃 (7—4)

前R I事務総長 ジョージ R. ミーンズ

帰国後報告書を作成

9月7日火曜日私は東京を発って帰国した。国際ロータリー本部に到着した私は今回の日本訪問に関する詳細な報告書を作成した。この報告書は翌年1949年1月に開かれたR I理事会で慎重に検討され、そしてこのときの理事会で「できるだけ早い適切な時期に日本のロータリーの再加入を認める」ことが決議されたのである。

再度来日

1949年3月9日水曜日、私はまた東京にやってきました。今度は日本に仮ロータリークラブを結成する仕事を手伝うようにとのR I理事会の指示を受けて来日したのである。

当時、海外からの日本訪問者の宿舎割当は、GHQ系統の機関を通じて行なわれており、私の宿舎は帝国ホテルと指定された。帝国ホテルは都心に在り、交通、食事、その他の面で大変便利な場所にある。このホテルは一般に海外からの訪問者のセンターとみなされ、外国人訪問者の多くはこのホテルに宿泊できることを喜んでいたのである。だが私は不満でこの指定を受け入れなかった。なぜなら私は日本の人々の手助けをしようとやってきた人間であり、したがって日本人が私を訪ねたいと思った

前号では、ミーンズ氏が故小松隆氏とともに神戸木曜会、大阪金曜会、京都水曜会を訪問、元ロータリアンの復帰への熱意にふれ、9月4日(1948年)朝東京に帰着、同日午後工業倶楽部での全国七曜倶楽部代表者会議に出席したところまで紹介した。

とき、いつでも気楽にやって来られるような場所がよい、外国人や軍人だらけの帝国ホテルでは好ましくないと考えたのである。

来日当夜は雅叙園観光ホテルにひとまず泊り、次の晩は都心により近い芝パークホテルに部屋を見付けた、そして2日後に丸ノ内地区のホテルに部屋を確保することができた。このホテルは交通に便利で、それから数週間私はここに滞在した。

東京クラブの再建に着手

木曜日の朝、手島知健氏と短時間会い、私の再来日の理由を話し、次の日の1時半にもっと詳しく話し合おうと打合わせた。

翌日金曜日の午後、手島氏は約束通り訪ねてきてくれたが、小松隆氏と小林雅一氏が同伴していた。3時間ほど話し合ったが、このとき私は七曜倶楽部がそのままロータリークラブに移行することはできない旨を指摘し、ロータリークラブを職業分類の面からはもとより、人間的にも優れた人々で構成することの重要性を強調した。また元のロータリークラブの会員、あるいは現在の七曜倶楽部の会員であっても無条件で仮ロータリークラブに入会してもらうことになるとは限らないという点についても指摘

1948年9月来日したミーンズ氏を囲んで、左端柏原孫左衛門(東京)、右端故小林雅一(東京)、後列左より2人目伊藤次郎左衛門(名古屋)、右端伊藤鈴三郎(東京)の諸氏



した。まだ政府の審査終了待ちの立場にあった小松氏をはじめ、みなこの件について理解してくれた。次の会合は翌週の火曜日午後2時に持つことを約束して別れた。

チャーターメンバー選考に苦勞

翌土曜日の晩は、小林氏と夕食をともにし、3時間余にわたって話し合った。氏は私が見たこともないような大きな苺の入った箱を持ってきて食べさせてくれたが、外観と同じように、味も素晴らしかった。二人はきわめて率直に話し合った。当時七曜倶楽部のメンバーのなかには、公けに活動できない立場の人が何人かいた。その人数が一番多かったのは東京である。

戦前および戦時中の社会的あるいは経済的活動のため、あるいは軍事もしくは政治活動のかどで追放令にかかっていたのである。このため事情は微妙となり、追放令に関係したこれらの人々は、仮ロータリークラブの結成に、または国際ロータリーに迷惑を及ぼすようなことは一切避けたいとの考えを明らかにしていた。この件について、私は“アウトサイダー”として、仮ロータリークラブのチャーターメンバー・リストを作成する際、これらの人々を公正かつ適切に処遇するのに役立つ情報を入手できるのではないかと考えた。そこで私は政府その

他の関係筋にあたって、この件に関する意見や資料を提供してもらった。この種の複雑かつ微妙な問題にはつきものであるが、実にさまざまな意見を聞かされた。だが実業界で追放令にかかった人が、ただそれだけのことでロータリーの会員となる資格を否定されるべきではないという点で、大体の意見は一致していた。

3月15日火曜日の1時半、かねての約束通り、私は手島、小松、小林の3氏と会った。手島氏は東京水曜倶楽部の役員および会員選考、職業分類の各委員長をふくむ9名の会員を同伴してきた(これら諸氏のうち6人は、前年9月4日工業倶楽部で開かれたあの会合に参加した人々である)。会議を始める前に、手島氏がここに出席した全員はこの会合の目的をよく知っている旨を告げた。それにもかかわらず、私は特にこの9名の新参加者のために、R I理事会の決定について説明し、私が来日したのは日本のロータリークラブ結成促進を援助せよとのR I理事会の指示による旨を明らかにした。そのあと翌日行なわれる東京水曜倶楽部の例会で、全会員に私の来日目的について知らせるためのプランの作成にかかった。この会合には、同倶楽部の役員も出席していたので、その例会で水曜倶楽部を

解散し、東京仮ロータリークラブを結成するための委員会を設置する件を決議することも決めた。ここに集った人々のロータリークラブ結成への関心と熱意は胸を打つものがあつた。またすべてを完璧に進めていく手際よさに安心感を覚えた。それは、これ以上迅速かつ具体的手配は望めないとと思われるほど鮮かであつたのである。

これまで会合のたびに、私は東京仮ロータリークラブ結成の詳細な計画を編成することが大切である旨強調してきたが、日本の首都に強力なクラブを創るということだけではなく、日本全国のクラブが模範とするに足るようなクラブを創るためにも、この点を重ねて強調してきたのである。この点に関連して、私がかねてより、日本全土にあつた六つ、アデッショナル・クラブを結成し得る都市があるのではないかと、関係者の考えを聞いてきた。この3月15日の会合でもこの点について全員の意見を求めてみた結果、福岡、神戸、京都、名古屋、大阪、札幌の6都市を訪問してみるべきであるという結論がでた。これら6都市にロータリークラブを結成することは、ロータリーの根を本州、北海道、九州の三つの地域の枢要な地点に植えることを意味し、そこから新クラブの結成が急速に進むはずであるからである。この結論にもとづいて、その日直ちに上記6都市の七曜倶楽部に電報を打ち、それら倶楽部の代表に3月22日東京に集ってくれるよう手配がなされた。このように物事が急速に進み、手際よい協力が得られたのは、関係者がロータリーの価値を深く信じ、日本に有力かつ活発なクラブを速やかに結成するため、各自が時間と精力を進んで惜しみなく捧げてくれたからにほかならない。

この日の午後の会合では大きな成果が得ら

れた。5時半まで続いた会議のあと、小林氏が私のホテルまで一緒に来てくれ、二人で水曜倶楽部の会員、職業分類、出席記録などについて検討し合った。そそくさと夕食をとって45分間中断した以外、二人はこの作業を夜の11時まで続け、東京仮ロータリークラブの基盤となる会員リストをひとまずまとめたのである。外出禁止の時刻をとくに過ぎていたが、小林氏はタクシーで無事家まで送り届けられた。

東京水曜倶楽部の解散

1949年3月16日水曜日は忘れられない日である。東京水曜倶楽部の例会はいつものように工業倶楽部で開かれた。この例会は重要な意味をもつたものであるため、閉会時間は30分延長されて2時とされていたが、誰一人中途退出する者はなかつた。

まず私が立上って少し話し、そのあとロータリー復帰協議会の手島会長が、倶楽部役員を推進している復帰計画について詳しく話し、かつまた次にとられるべき必要な手続方法について説明した。これを聞いた全会員は喜びを一杯にあらわし、興奮しながら立上って賛同の意を表した。この光景を自分のこの目でみることができた私は幸せ者であると思う。かくて東京水曜倶楽部は新たな発展のために解散され、東京仮ロータリークラブ結成準備委員会が直ちに設置された。散会前に全会員は幾つかの決議案を採択したが、そのなかには国際ロータリー理事会および小松隆氏に対する感謝決議もふくまれていた。

2時15分に結成準備委員会が開かれ、二つの小委員会つまりR Iおよびクラブ定款・細則を研究する委員会と、会員選考を担当する委員会を設けた。(以下次号)

日本ロータリー再建の頃 (7~5)

前RI事務総長 ジョージ R. ミーンズ

前号では、1949年3月に再度来日したミーンズ氏が早速東京ロータリークラブの再建に着手、その結果東京水曜倶楽部が解散して、東京ロータリークラブ結成準備委員会が設置されたところまで紹介した。

東京RCのチャーターメンバー決まる

東京ロータリークラブ結成準備委員会内に設けられた会員選考担当の小委員会は1949年3月17日(木)の午後1時半に開かれることになった。これには私も出席を求められた。当日開かれたこの小委員会は4時間ぶっとおしで続けられ、小林氏と私が前から用意しておいた資料を参考に検討を進めていった。その結果これまで東京水曜倶楽部の会員であった人々の75%がチャーター・メンバーリストにふくまれることになったのである。委員会の最中に軽い地震があり、水差しのなかの水が相当波立ったが、委員達はいつもの程度だというような余裕ある笑顔を交していた。なかには「我々はいま大地を揺がすような大仕事と取組んでいるのだ」と冗談をとぼす人もいた。

翌金曜日の午後、定款・細則を研究する小委員会に出た。この委員会はすでに徹底的な調査研究を終えており、推奨クラブ細則を採用することが決定された。その午後おそく開かれた結成準備委員会では、157名のチャーター・メンバーリストの採択が承認された。

このメンバーリストには、1人ととても目立つ人物が欠けていた。小松隆氏である。氏は自分のまわりの疑惑の影がすっかり消え

るまで友人や国際ロータリーに迷惑を及ぼす危険をおかすことを避けたのである。他の誰にもましてその実現を夢見、そして働き、その夢が正夢となろうとするそのときに、氏は自から身を引いた。これこそ超我の奉仕の最たるものではなからうか!

幸い、それから数ヶ月して、氏は晴天白日の身となり、直ちに東京ロータリークラブの会員となった。小松氏はあとでこの経験は「最も良く奉仕する者、最も多く報われる」の実証だったと私に述懐したことがある。

ここで話は戻る。3月15日に打った電報に応じて、福岡、京都、名古屋、神戸、大阪、札幌の七曜倶楽部の代表が上京してきて、3月22日(火)の正午東京仮ロータリークラブ結成準備委員会と会合を持った。

昼食を済ませたあと、3時間以上にわたって、クラブ結成の手續と方法が詳しく討議された。初めに私が英語で説明したが、明らかに全員が理解してくれたようである。そのあとを受けて手島氏が更に長時間にわたって大体同じようなことを説明し、質問があると分りやすく説明をした。代表達はノートをとりながら質問していた。みな例外なく、地元に戻着次第すぐ予備活動を始め、私が各代表の地元を訪問したと

き、直ちに効果的な活動を始められる態勢を整えておこうという気持がありありとうかがえた。

翌3月23日水曜日、以前の東京水曜倶楽部の例会場で、例会時間も同じ時刻に、東京仮ロータリークラブの創立総会が開かれた。手島氏と私がまず話し、そのあとクラブ役員の選挙に移り、小林雅一氏が会長、田辺元三郎氏が幹事に選ばれた。総会終了後私はシカゴの国際ロータリー本部に、東京仮ロータリークラブのRI加盟申請書を郵送した。この日は国際ロータリーにとって記念すべき日であり、また日本のロータリーにとって大きな意義ある日となったのである。

マッカーサー元帥を名誉会員に

ところで、それまでの東京クラブ結成の準備段階で、友人達と話し合っているとき、ロータリークラブの会員制度についてしばしば質問を受けていた。質問は主に名誉会員に関するものであった。この種の質問に答えているうち、ふと私にある考えが浮んだ。ロータリー復帰協議会の活動に多大の好意と援助を差しのべてくれたマッカーサー元帥こそ名誉会員に推戴される資格があるのではないかと。もしそうすれば元帥も喜ぶのではないかと信じた。だがこのことを東京クラブのメンバーに話すことはためらっていた。そのうち、小林氏と話し合っているとき、このことを言い出すきっかけがあったので、マ元帥を東京クラブの名誉会員に推戴したら、みなはどう思うだろうかと聞いてみた。すると小林氏はこのアイデアに乗り気になり、みなも喜んで賛成すると思うと答えた。だが氏は元帥にお願いしても果して受け入れてくれるかどうかを懸念し、その点をはっきりしないうちは、発表しないほうがよいという意見であった。

時期的にいうと、これは結成準備委員会

が設けられる前に考えつき、小林氏と話し合ったことである。同委員会が発足し、定款細則および会員選考の小委員会もそれぞれ設置されたあと、私はマ元帥に東京仮ロータリークラブ結成の進捗状況について話をする機会を得た。報告に行ったということではなく、また承認を得るためというわけでもないが、進捗状況を知らせておくのが作法であると思ったのである。元帥は仮クラブの結成が順調に進んでいると聞いて喜び、RIに加盟を認められたときは知らせてくれるようにと言った。この話の際に、もし要請されたら、東京ロータリークラブの名誉会員となっただけのかどうかたずねてみた。まだクラブ自体そのような要請をすると決めているわけでもなく、したがって私の話もあまり根拠のないものであるかと前置きして、元帥の意向を打診してみたのである。すると元帥は「要請があれば、大喜びで受けるよ」と即座に答えた。

さて、東京ロータリークラブは1949年3月29日にRI加盟を認められた。仮クラブ結成のために一緒に努力していた頃、私は関係者に、認証状授与式を、幸先のよいめでたいものとする事の重要さを強調してきた。認証状授与式がまもなく現実のものになろうとするときにあたって、初代会長となる小林氏も、この授与式を今後結成されるであろう日本の他のロータリークラブの模範と励みになるような立派なものとしたいと、色々気を遣っていた。その小林氏に向って、以前に二人で話し合ったことのあるマ元帥を名誉会員として推薦する件を再び持ち出し、クラブが要請すれば、マ元帥が受けることは確実だと思うと話した。氏はすぐこの件をクラブに諮り賛成を得た。そしてマ元帥宛に心のこもった要請状を書いたが、元帥にどう届けたらよいか迷って



1949年4月27日東京ロータリークラブの認証状授与式が工業倶楽部で行なわれ、主賓として故吉田茂首相（右端）が出席した。左端はミーンズ氏より認証状を受ける小林雅一（故）東京RC会長

いたので、私がそれを元帥の事務室に届ける役を買って出た。4月14日午後5時にその要請状を元帥の事務室に届け、手紙とともに副官に託した。その晩8時に小林氏から電話があって、元帥の事務室から電話連絡を受け、4月18日（月）の12時半に元帥とお会いできることになったと言ってきた。氏はとても喜んでいて興奮し、期待にあふれているようであった。

吉田首相を認証状授与式に招待

この重大な月曜日、私は元帥と会見を済ませたばかりの小林氏と一緒に昼食をとった。氏は元帥が非常に丁寧に誠意をもって会ってくれたこと、そして名誉会員推戴の要請を受けてくれたことを詳しく話してくれた。その会見の際元帥は次のように語ったという「ロータリーは二つの強味をもっている。一つは内部的なもので、他の一つは外部的なものだ。内部的には、ロータリーは会員同士の友情と親睦を深める。外部的には、社交的な意味そしてまた会員の商工業上の活動で、地域社会との理解を深め合い、更には国際理解の増進に大きく寄与する。不安なこの世界にあって、このような団体はいま緊急に必要とされている。ロータリーは宗教関係を除いては、戦後の日本で最初に世界の仲間入りを認められた国際団体である」と。

さて、認証状授与式の際に、時の吉田茂総理大臣が出席してくれたら、クラブにとって素晴らしい名誉なのだがとする意見がいろいろな人からいろいろな機会に出されたが、一国の総理大臣にそれをお願いする役を買って出ようとする人はいないようであった。だがマ元帥が名誉会員となった関係上、総理大臣に出席していただく意義はあるのではないかと私は考え、小林氏と話し合った。クラブ会長たる氏には吉田総理を招く責任があると私は言ったのである。

それからしばらくして、吉田総理が喜んで授与式に出席してくれるとの報告が小林氏よりもたらされたとき、誰もが大変喜んだことはいうまでもない。

授与式に先立って、この件は全国の新聞に報道された。全国のロータリー復帰協議会メンバークラブの代表はもとより、各界の名士が式に招待された。

認証状授与式は、4月27日水曜日の正午工業倶楽部で、特別昼食会をはさんでおこなわれた。当日は約300人の人が参加した。主賓は吉田総理である。マ元帥が名誉会員となることを受諾した旨の発表もおこなわれた。主要講演者には国際ロータリーを代表して私が選ばれた。余興も素晴らしく、なにからななまで立派な式であった。

日本ロータリー再建の頃(7~6)

前R I事務総長 ジョージ R. ミーンズ

1949年(昭和24年)4月27日に東京ロータリークラブの授与式が済んだあとすぐに、ロータリー復帰協議会のメンバーである17の七曜倶楽部の代表が会議を開いて、同協議会を解散する旨決議した。これが復帰運動の最後の手続となったわけである。

かくてロータリーは日本にしっかりとその根をおろした。もはや七曜倶楽部あるいはロータリー復帰協議会を維持する必要はなくなったのである。その晩私は小松隆氏と織子夫人を招いて夕食を共にした。小松氏こそ特別に意義あるこの日の出来事についてまず第一に直接報告を受けてしかるべき人であると思ったからである。

大阪

戦前、ロータリーが日本に創始されたとき、東京に次いで2番目に結成されたのは大阪ロータリークラブであった。東京クラブが再建されたあと、私が大阪へ行くようにと言われたのは、大阪が日本第2の大会であるということのほか、そういう事情があったからだと思う。

1949年3月24日木曜日の朝、手島知健氏と私は大阪へ着いた。寝台車で行ったわけだが、その際豊田元海軍大将と乗り合わせた。豊田氏は外務大臣を務めたこともある人だ。夜があけてまもなく大阪へ着くという頃、豊田氏は私に朝食用にと行って、リンゴとミカンをくれた。元米国海軍将校であった私は、氏のこの好意のジェスチャー

前号では、マッカーサー元帥が東京ロータリークラブの名誉会員に推選され、同クラブの認証状授与式が、故吉田首相の出席を得て、盛大に行なわれたところまで紹介した。

には深く感じるものがあった。

さて大阪へ着いた私達は、すぐ大阪仮ロータリークラブ結成のための会議に加わり会員候補者の職業分類について、2時間ほど検討し合った。翌日(金)の朝、職業分類審査の仕事が終わり、大阪仮ロータリークラブのチャーター・メンバーリストに約80名の氏名が記入された。

大阪金曜会の例会は多数の出席のもとに大丸デパートで開かれた。この例会の目的はすでに会員に徹底されていたため、ほとんど全員が黒い背広を着用しており、ウィング・カラーを着けている人も多数いた。この会議の意義を示すかのように、モーニング姿の会員もいる。この例会で金曜会は解散され、12名の会員が仮ロータリークラブ結成準備委員に指名された。大阪金曜会は、3月22日東京で開かれたあの七曜倶楽部代表会議に代表を送っていたし、またロータリークラブを結成する方法や手続について詳しい資料が行き渡っていたこともあって、仮クラブ結成は円滑に進んだ。結成準備委員会は次の日の午後また会合することに決めた。露口四郎幹事が職業分類のことで私と詳しく打ち合わせたいとのことなので、翌々日の日曜日3月27日にまた会うことにした。

4月2日土曜日、私が京都にいるとき露口幹事が大阪仮ロータリークラブの加盟申請書を完璧に仕上げ持ってきてくれた。

大阪ロータリークラブが国際ロータリーに加盟を認められたのは、それから11日目の1949年4月13日である。

神戸

1949年3月24日木曜日12時15分、隣寸会館で開かれた神戸木曜会の例会に出席。前年の9月小松氏と一緒にこの会の例会に出席した際知り合った鈴木岩蔵氏はじめその他多くの人々と再会した。神戸木曜会のメンバーは他の七曜倶楽部やロータリー復帰協議会と密接に連絡し合っていたので、今後の進行やとるべき方法手続などについて充分の予備知識をもっていた。手島氏と私が話をしたあと、メンバーは神戸木曜会を解散し、神戸仮ロータリークラブ結成準備委員会を設置した。

その日の午後2時20分に、オリエンタルホテルでこの結成準備委員会と会合を持つ。まず標準クラブ定款と推奨クラブ細則について仔細に検討し、ついで各会員自身ならびにその出席に関する記録を慎重に検討する。それから神戸木曜会の最新の職業分類表を、R Iの職業分類概要と苦勞して比較しながら分析。こうして午後6時までには、神戸仮ロータリークラブのチャーター・メンバーリストに記入される44名の人人が選ばれた。結成準備委員会の小委員会たる職業分類委員会のメンバーと大阪で日曜日の午前10時に再会する手はずをつけたのち、手島氏と私はその晩のうちに大阪へ帰ってきた。

この職業分類委員会のメンバーである鈴木岩蔵、百崎辰雄両氏と約束通り、3月27日日曜日の朝再会、二人はすでに仕事を相当進めており、下ごしらえはすっかりできていて、残るのは仕上げだけであった。鈴木氏は正午までに神戸へ帰る用事があったが、百崎辰雄氏はそのあと私を大阪市内の名所史蹟案内に連れていってくれた。

次の土曜日、手島氏と私が福岡から京都

駅へ着きホームに降り立つと、神戸仮ロータリークラブの鈴木岩蔵会長と百崎辰雄幹事が私達を出迎えてくれた。鈴木会長はモーニング姿である。二人は仕上がった同クラブの国際ロータリー加盟申請書を私に手渡した。鈴木氏はまた有名な吉田木刻師の彫った根付けを私にプレゼントしてくれた。氏の祖先伝来のものであるが、そこに彫られている達磨大師の意味合いから私に持っていてもらいたいとのことであった。この彫刻の意味を説明してくれと頼むと、氏はそれは手島氏のほうが適任だという。手島氏は遠慮してためらっていたが、次の日の朝すっかり説明してあげましようと言った。当日手島氏は日本の辞典を調べてみたと言って、次のように説明してくれた。

「達磨は南印度の王子であった。仏教を学んだあと中国へ渡った（梁の武帝の時代—西歴502～559年）。そして悟りをひらこうと、9年間壁に向って瞑想にふけた。悟りを得た達磨は人々から敬まわれ、崇められた」

それから手島氏は、氏自身の意見を次のようにつけ加えてくれた。

「9年間、ロータリーが日本に復活する日の来るのを待って、黙々とロータリーの理想の実践に努力してきたが、今その努力は報われた。これは達磨大師と相通じるものがある」と。

これを聞いて私は深く感動した。なぜなら、これは日本全国にいる、鈴木岩蔵氏のような献身的な人々の気持の深さと誠意を示すものと考えたからである。単に価値ある芸術作品としてだけではなく、日本にロータリーを再建するために献身した日本人の決意と目的を象徴するものとして、この達磨大師を彫った根付けを今でも大切にしている。神戸ロータリークラブは1949年4月13日にR Iより加盟を承認された。大阪ロータリークラブの承認と同じ日である。

京 都

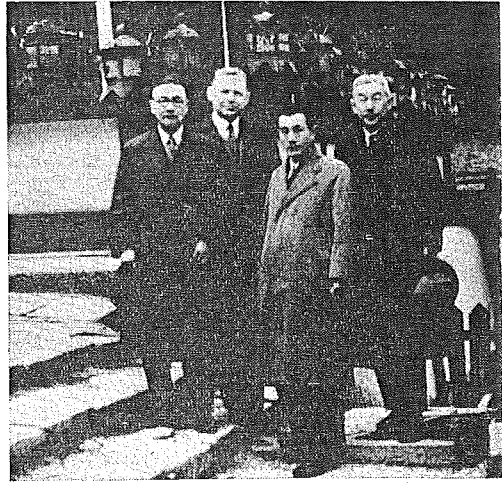
前年1948年の9月に京都に立寄ったとき、京都水曜会のメンバーから「水曜会をロータリークラブにするためにはどんなことをしなければならぬか」という質問を繰返し受けた。水曜会のメンバーは、ロータリアンとなれる日を強く望んでいたのである。1949年3月22日東京で開かれた全国七曜倶楽部の代表者会議に京都水曜会も代表を送ったが、そのあとできるだけ早い機会にロータリークラブ結成に向って動き出せるよう、必要と目されるあらゆる準備をととのえ終っていた。

3月26日土曜日の朝、手島知健氏と大阪から汽車で京都に着く。駅には水曜会の大沢善夫会長と森田二郎幹事そして石川芳次郎氏（1955～56年度ガバナー）が迎えてくれた。私達は会員選考および職業分類に関する諸点について数時間にわたって話し合い、質問に答えた。京都水曜会はすでに解散されていて、その日は京都仮ロータリークラブ結成のための特別会合が銀行クラブで開かれることになっていた。私達二人もこの会合に出席し、ここで京都仮ロータリークラブが会員数57名で正式に結成された。

日本全国にロータリークラブの結成を進めるために、いま始められている努力を全会員に知ってもらおうと、手島氏と私が話をする。私達の話が終ったあと、石川氏が英文翻訳付きの声明書を私に手渡した。それには次のように書いてあった。

「国家社会党を先頭とする極右翼主義者の運動により、日本のロータリークラブに重大な圧迫が加えられた。1934年、満州事変の直後、同党はロータリークラブを非愛国者団体ときめつけ、即時解散を要求する決議を採択した。

我々はロータリーが決してそのような団体ではなく、“超私の奉仕”をモットーと



1949年4月奈良の二月堂にミーンズ氏を案内する京都ロータリアン。右より故和辻春樹、森田二郎、ミーンズ、故北尾尾三郎の諸氏。

し、国際平和のために可能な限りの努力をしている団体であることを、再三にわたって彼等に説明した。彼等がロータリーの活動を理解し、妨害をやめるまで約3カ月にわたり話し合ったのである。

だが、今度は憲兵や特高警察がロータリーは秘密結社であり、スパイの温床であるとして、我々をつまわすに至った。それが全くの誤解であり、ロータリーに秘密はなくすべてはガラス張りだと彼等に説明した。それでもなおロータリーに対する圧迫は日ましに強くなっていった。ロータリアンは一人として例外なくロータリーを好き、ロータリーを愛していた。

それ故にこそ我々は解散に至るぎりぎりまで、あらゆる圧迫に抗し続けたのである。彼等の圧迫の手は会員個人にまで及び、会員家庭を訪ずれてロータリー退会を説得した。にもかかわらずご存知のように我々は七曜のいずれかの日をクラブの名称にして毎週例会を続けてきた。我々がいかにロータリー家族に復帰を望んでいたかは、これら不当な圧迫に抗し続けてきた事実を示されている。いま我々は再び国際ロータリーの一員となり得たことを大いなる幸せとして感謝するものである。復帰は講和条約締結まで望めないものと考えていたので、我々の喜びはひとしおのものがある」

日本ロータリー再建の頃 (7-7)

Japan's Return to Rotary

by George R. Means, General Secretary, Rotary International, 1953-1972

前R I事務総長 ジョージ R. ミーンズ

3月28日(月). 大阪滞在中に京都仮ロータリークラブのR I加盟申請書が届けられたので、私は即日それをR I事務局に送付した。そして京都ロータリークラブは1949年(昭和24年)4月5日R I加盟を認められた。

福岡

福岡ロータリークラブは、1940年に活動を停止し、福岡清和会に引継がれた。清和会は日本全国の七曜倶楽部と密接に連絡をとり合い、後にロータリー復帰協議会に参加した。清和会も3月22日東京で開かれた全国七曜倶楽部代表会議に代表を送っていたので、3月29日(火)に始まった私の訪問の目的を熟知していた。

午後1時15分手島氏とともに福岡到着。1時50分より福岡仮ロータリークラブ結成準備委員会の代表8人と会議に入る。私達の到着前に、ややこしい問題についてはあらかじめ打ち合わせをしていたとのことだ。4時間中断なく会議を続行したあと、翌日の朝会議再開を決めて散会。

日本旅館を初体験 旅行中手島氏やその他の人々に、宿舎や食事は日本風で結構と何回となく話してあったが、それまでは行く先々で洋式ホテルに投宿していた。だが福

前号では、京都ロータリークラブが再建され、石川芳次郎氏が声明書をミーンズ氏に手渡したところまで紹介した。(注 この回顧録は7回で連載終了の予定でしたが、スペースその他の都合で今回で完結できず、あと1回連載を延長します。

岡でようやく日本旅館に泊めてもらうことになり、大変嬉しかった。初めてのことでいろいろと手引していただく。手島氏の以前の事業関係の友人が何人か福岡にいたので、氏は彼等と夕食を共にすることにし、私も誘ってくれた。手島氏がまずみんなで風呂に入ろうと言う。日本式の風呂である。氏が私の背中を流してくれ、私も氏の背中を流した。お湯のなかにじっと浸っていることを初め、すべてが初体験で非常にさわやかな気分である。このあと浴衣を着てゆったりと坐り、話しながら御馳走をいただき、すっかりくつろぐ。

翌朝再び結成準備委員会と会合。そのあと別の会合に出席、この会議は2時間続いた。福岡清和会は1週間前すでに解散しており、したがってこの会合での論議は、R Iに加盟を申請するための手続に絞られた。午後おくそくまで、また結成準備委員会との会合が続く。

その晩、仮クラブ結成に協力し合ってきた人々が集って晩餐会が開かれた。参会者のなかに中牟田喜兵衛氏がいた。氏は東京で開かれたあの七曜倶楽部代表会議に参加した一人であり、私達の今回の福岡到着前に、下ごしらえをしてくれた人である。氏の英語は私の日本語より多少ましな程度であったが、話はお互いによく通じ合った。



通訳が必要になると手島氏がいつでも喜んで務めてくれた。

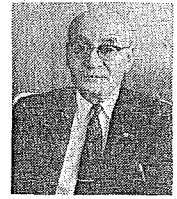
夕食の最中、中牟田氏が私
中牟田喜兵衛氏の席にやってきて、美しく包装された包みを前に置いた。約30cm四方、高さ45cmぐらいのものだ。氏がなにか話をした途端、大きな歓声があがり、その話の内容が余程おかしかったらしく、全員が爆笑した。中牟田氏がなんと言ったのか説明してくれと手島氏に頼むと、まず包みをあけてみて下さい。そのあとで話しますと言う。包みをあけてみると、ガラスケースに入った愛らしい博多人形であった。有名な人形師が製作したものとのこと。全員の拍手がひとしきり続いた。それから手島氏がおもむろに中牟田氏の言ったことを翻訳してくれた。内容は次の通りである。

「貴方が福岡にいる間に、私どもはあなたの人柄を大変好きになった。だがまだ独身だと聞いて残念に思う。年頃の男性が独りであるのは良くない。そこでこの日本人形をいつも傍においていただきたい。彼女が貴方に幸せをもたらすよう祈ります」

会員数33名で発足した福岡仮ロータリークラブのR I加盟申請書は4月18日東京で受取った。即日R Iに郵送、そして福岡ロータリークラブは1949年4月22日R I加盟を認められたのである。(注)博多でいただいたこの日本人形は今もわが家の目立つ場所に飾られている。過去27年間、家内のマナーはこの人形を私と同じように大切に扱っている。

名古屋

3月22日東京で開かれた全国七曜倶楽部と



ロータリー復帰協議会代表の会議の際、名古屋から来た代表が議事を殆んど逐語的に記録しているのではないかとと思われるほど熱心にメモしている姿を私は見て

水野 智彦氏

いた。名古屋訪問前に定款細則案と会員および職業分類リストを受けとり、検討してみたが、珍しいほどすべてがよく整備されていた。あの東京での会議で出された提案をしっかりと書きとっていたことが、この出来栄えとなったのだろう。

4月4日(月)の昼間、手島氏と私が名古屋駅に着くと、J. P. 水野(現名古屋RC水野智彦会員)氏が迎えてくれた。氏は東京での代表会議の際、あらゆる事項を細目に至るまでメモしていた人である。水野氏の話によると、名古屋ロータリークラブは1925年2月にR Iに認証されて以来、例会を1回たりとも休んだことはなく、1940年10月日本のロータリー解散後も、メンバーは名古屋同心会の名称で例会を続けてきたという。1945年の末以降七曜倶楽部およびロータリー復帰協議会の活動が盛んになると、名古屋同心会を名古屋火曜会と改称したとのことだ。

さて、名古屋仮ロータリークラブ結成の諸手続が細目に至るまで完全に済んでいることは明かであった。私達の訪問を予期して、名古屋火曜会は前週すでに解散していた。したがって火曜日にはもはや例会はなかった。だが名古屋仮ロータリークラブの創立総会が水曜日の正午に開かれることになっており、私も話をする事になっていた。この総会に先立って、結成準備委員会と会合し、基本的書類を検討してみたが、すべてが完璧であった。4月6日、ロータリーに熱意を燃やす一同が集り、役員および理事を選出し、会員数47名をもって名古屋仮ロータリークラブが結成された。加盟

申請書を直ちにR Iに送付し、1949年4月13日、大阪、神戸両ロータリークラブと同時に名古屋ロータリークラブもR I加盟を認められたのである。

札 幌

東京からの所要旅行時間でいうと、札幌への旅行が一番長かった。そのうえ、本州から西へ向い、九州に行ったときは、緯度の違いは2度程度であったが、東京と札幌では緯度は8度も違う。したがって地理的条件や土地の利用方法が目立つほど異なっている。汽車旅行は青森で中断され、そこからフェリーで函館に渡り、そこでまた札幌まで汽車を乗り継いだ。

それまで多くの国を旅し、遠隔の地へも行ったことがあるが、電気カミソリを使うことができなかった経験は1回しかない。したがって人口の多い日本で、このことで苦勞するとは思ってもいなかった。だが青森に着く前、汽車のなかに電気カミソリを使う設備のないのに気付いた。この分では札幌へ向う汽車はもちろん、フェリーにも設備はないのではないかと考えた。ヒゲを剃らないでおくのは大嫌いなのだが、設備がなければ仕方がない。札幌で迎えに出てくださる人々も事情を分ってくれるだろうと、覚悟を決めた。

電気カミソリに見物蛸集 青森で船を待つ時間が2時間ばかりあったので、手島氏と一緒にあたりを散歩し、また港まで帰って来る。道の上3～4米ほどの高さに電燈がぶら下がっているのを見て「あれがもっと低ければソケットで継いで電気カミソリが使えるのだがなあ」と冗談をとばした。すると手島氏が「ちょっと失礼」と言ってどこかへ行き、すぐ駅員を二人連れて戻ってきた。みると二人の駅員は長い梯子を抱えている。なにをするのかと思ったら、ぶら下

っている電燈の下にその梯子をセットした。手島氏が身振りでヒゲを剃る真似をして「やれ」と合図している。全くの冗談で言ったことだがこうなるとは嫌も応もない。電気カミソリとアダプター・プラグをブリーフ・ケースから取り出し、梯子に登って電線に接続してヒゲを剃り始めた。通行人が数人立どまって、珍らしいことをやっているなあといった風に私を見上げている。かまわずジジーやっているうちに、30人ぐらいの人が梯子の下に集ってきしまった。当時青森では電気カミソリはまだ珍しかったのだろう。

剃り終って、梯子のまわりに驚いたような表情で見上げている人々の顔を見て、ふと思いつきカミソリを指ではじくとヒゲがホコリのように落ちる。途端に見物人から爆笑と拍手が起った。みんな楽しかったらしい。私もさっぱりした。

皮肉なことに、フェリーに乗ってみたら、コンセントが便利な位置にたくさんついており、電圧もアダプターなどを使わずに済むものであった。

4月20日(水)午前6時5分札幌到着。仮ロータリークラブ関係者12人の出迎えを受ける。午前9時から正午まで結成準備委員会と会合、定款細則について話し合い、会員および職業分類リストを検討する。チャーターメンバーは48名に決まった。

札幌水曜会は、前週解散されていた。そしてこの水曜日の会合で札幌仮ロータリークラブが正式に結成され、役員その他を選出し、R I加盟申請書を提出するのに必要な決議をした。札幌仮ロータリークラブはすぐ加盟申請書の作成にかかり、22日の晩私達が札幌を去るとき、それを私に託した。札幌ロータリークラブは1949年5月2日R I加盟を認証された。(以下次号)

日本ロータリー再建の頃

(最終回)



前RI事務総長 ジョージ R. ミーンズ

前号までに、東京、大阪、神戸、京都、福岡、名古屋、札幌の7ロータリークラブが再建される過程が紹介された。今月号では、地区設定、地区ガバナー選出などの最終仕上げを紹介して、8回にわたったこの回顧録を終る。

RIの管理運営

人々を集めてロータリークラブを結成しても、そのクラブが全世界のロータリークラブの集合体つまり国際ロータリーの完全な一員となるまでは、仕事が完成したわけではない。この仕事の完成には多くの組織的手続が必要となる。そのなかで最も重要なことが二つある。その一はクラブを地区に包含することであり、その二は組織の経済的負担をすべてのクラブで分ち合ってもらうことである。

国際ロータリー（RI）は運営を効果的におこなうために、全ロータリークラブを地区に編入することを基本方針としている。地区の設定に必要とされるクラブ数は一定していない。しかし地区を運営するのに要するRIの財政的負担をまかない、かつまたRIの全面的運営に貢献し得るだけのクラブ数がなければ、地区は設定されないことになっている。

RI理事会は、ロータリークラブ再建のため私を日本に派遣するにあたり、さしあたって地区の設定に通常必要とされるほど多

くのクラブを結成する必要はなく、私がそこまで直接努力する必要はないとの見解をとっていた。だが理事会はまた1940年に日本のロータリーが解散する前、日本には三つの地区があって活動していた事実をも考慮に入れていたのである。したがって重要な都市に幾つかのロータリークラブが整然と結成されれば、日ならずして各地に続々クラブが結成されることになると当然予期していた。であるから適当と判断した場合には、地区編成に着手してよいという権限を、訪日前に私は理事会から与えられていた。

地区を設定したら地区ガバナーの指名が必要となる。地区ガバナーは米国で開かれる国際協議会に出席しなければならない。当時は海外に旅行できる日本人の数はきわめて限られていた。海外旅行の許可は容易なことでは得られなかったのである。

あらかじめこの点を考えていた私は、東京仮ロータリークラブが結成される以前の3月20日にマッカーサー元帥と会ったとき、RIの地区編成と地区の指導監督の任にあたるRI役員たる地区ガバナーの重要

性について説明し、今回の滞在中に日本に地区を設定したいとの希望を述べ、その年の5月米国で開催の国際協議会にガバナー・ノミニーが参加できるよう特別の配慮をおねがいをした。すると元帥は「その件については手紙をくれれば、私が直接配慮して、協議会に間に合うよう出国できるようにする」と即答してくれた。ビザやその他の手続の担当官の氏名を聞いたところ「それも注意しておこう」と言われた。

当時マ元帥は日本の国内通貨および外貨の金融統制に重大な関心をもって努力していた。私は国際ロータリー加盟クラブが組織の活動計画に参加し、各種文献あるいは視聴覚資料の提供を受け、あるいは管理運営の訓練指導その他さまざまなサービスの供与をR I事務局より受けている事実を一度ならず元帥に説明し、これらの費用が各クラブの人頭分担金の支払によってのみまかなわれている旨を説明した。したがって日本にロータリークラブができると、日本のクラブでも当然その分担金を支払ってもらうことになる点も説明しておいた。あらかじめこれらの点を元帥の耳に入れておいてから、日本のロータリークラブが支払うこれらの費用を米国に在るR I事務局に入金する方法についてたずねたのである。元帥は事情をよく理解してくれてはいたが、政府関係を除いては、外貨の送金は一切許可されていないと答えた。だが好意的に考えてくれ、R Iの資金のうち日本での活動に支払う必要のある部分があるのではないかとたずね、日本にR Iの銀行口座を設ければ、日本で使う費用は日本のクラブが入金した分担金でまかなえるのではないかと示唆した。R Iが在日外国銀行に口座を設けることは差支えない。ただその場合には、外国人をR Iの財務代行者にすることが必要となろう。もう一つの手段として、R Iが日

本の銀行に口座を設けてもよい。その場合は財務代行者は日本人でも差支えないと指摘してくれた。これは有益な助言であった。そこで私はR Iが日本に銀行口座を開く場合は日本の銀行にすることにし、責任ある日本人に財務代行者を委託すると答えた。

日本に七つのロータリークラブが結成されたいま、地区を設定し、地区ガバナー・ノミニーを選出し、更にまたR Iの銀行口座を開設し、財務代行者を指名しなければ、私の任務は完遂されたことにならない。

日本に地区を設定する件については、各クラブの代表と会合を重ねている際しばしば議題にのぼったが、具体的に煮詰ったものではなく、“来年は”という希望の表現程度にとどまっていた。だが地区を設定し、地区ガバナーを持ち、地区大会を開き、それによって国際ロータリーと一体となって活動したいという希望が、いつの場合も強く感じられていたのである。

七ロータリークラブの結成が進められていた頃、私はアディショナル・クラブの結成を待たずに、七クラブだけで地区を設定できる可能性があることを明らかにしておいた。これに対して、各クラブより例外なく、地区ガバナーは東京ロータリークラブの会員のなかから選ばれてしかるべきだと提案があった。

私が接触したすべての人々のなかで、地区ガバナーとして最も適任だと目される人が3人いた。小林雅一、小松隆、手島知健の3人である。3名ともすぐれた人物であり、献身的精神の持主である。

だが、このうち小松氏は個人的事情のため、東京ロータリークラブ入会が延期されていた。残るのは小林氏か手島氏である。この二人について、地区ガバナーとなった際に



負うべきさまざまな責任をにらみ合わせながら仔細に検討した。

それとまた地区ガバナー選出のほかに、R I が日本に銀行口座を開くので、しかるべき人物に財務代行の役を果してもらい必要がある旨を二人に話した。話が進むにつれ、小林氏は喜んで財務代行の役を務めたいと進んで申出てくれ、また手島氏は地区ガバナーとして奉仕したいという意志を明らかにした。

そこで七ロータリークラブは手島知健氏を地区ガバナー・ノミネーに選んだのである。手島氏は5月に米国で行われた1949年国際協議会に参加し、1949～50、1950～51年の両年度にわたってガバナーを務め、そしてまた1952～53、1953～54両年度のR I 理事として活躍された。

1949年にR I 事務総長は、小林雅一氏を在日R I 財務代行者に任命した。氏はその練達の手腕を發揮し、財務代行業務一切を組織し担当してくれた。氏は1966年に死去されるまでこの任にあったが、その間1952～53年度には地区ガバナー、1957～58、1958～59の両年度にR I 理事、更に1958～59年度にはR I 第1副会長を務めている。

追加ロータリークラブの結成

日本の友人達から提案され、私もそれを受けて、まず七ロータリークラブの結成を助け、この七クラブを核としてクラブを増やしていくことにしたわけである。だが、他の多くの都市の人々から手紙や電報あるいは直接訪問を受け、自分達の街にもすぐロータリークラブを結成してもらいたいと陳情された。その多くはすぐクラブを結成する用意がある旨を強調していた。実際にそうであったのであるが、私はロータリー復帰協議会の指導者の助言にしたがって行動

し、結成の努力を七都市に限り、この計画から逸脱しないように決めていたのである。



私は東京に活動の本拠を置いていたため、全国から首都に集ってくる人々が気軽に私を訪ねてきては要望を繰返していく。私もこれらの要望に応じて、七ロータリークラブが結成された都市以外の場所を三カ所ばかり訪ねた。

たとえば、3月29日から4月1日にわたった福岡訪問の際、3月31日(木)に長崎へ出かけている。その晩長崎で長崎木曜会のメンバー7人に会い、彼等が長崎にロータリークラブを再建したがっているのを知った。

また4月12日(木)、私は横浜の商工会議所で開かれた横浜同人会の特別会合に出席している。出席者に手島氏と私がしている仕事を説明したところ、七クラブが結成されたあとで、R I に加盟を申請する第一グループのなかに横浜を入れてほしいとの要望が出された。

更にまた4月20日の札幌での会合の際に、小樽火曜クラブのメンバー3人が出席していた。この3人の要望に応じて、翌21日(金)に小樽を訪問し、寿原九郎氏の自宅で会合を持った。彼等は札幌クラブが認証されたあと、できるだけ早い機会にR I 加盟を申請するべく必要な手続をすでに始めていたのである。

ロータリーに対する熱意は“爆発的”であった。日本にもっと多数のロータリークラブがすぐにも結成されるであろうことは疑いの余地がなかった。だがそれにしてもその後起きたあの驚くべき日本ロータリーの大発展を、当時あって完全に予測し得たものはなかったのである。

日本語ロータリー文献

札幌、この北海道の首都はまた有名な北海道大学の所在地でもある。札幌仮ロータリークラブの結成にあたって、すべての手続を整然と仕上げるのに大いに貢献したメンバーの一人に宮脇富氏がいた。氏は北海道帝国大学の教授であり、また米国のカンサス農科大学の卒業生で、同大学の講師を務めたこともある。酪農の専門家で、この分野で幾つかの著作がある。氏は英語をよく話すばかりでなく、語学の基本に蘊蓄があった。

札幌滞在中に宮脇氏が私のホテルに訪ねてきて、ロータリー文献について1時間余も話し合ったことがある。氏は国際ロータリー定款細則および推奨クラブ細則のなかの文言について意味の微妙な点を質問し、他のロータリー文献のなかにある関係点についてもたずねた。私はロータリーの用語に対する氏の関心が驚くほど高く、ひたむきなものすらあることを感じた。

その後まもなく宮脇氏は東京に移住し、東京ロータリークラブの正会員となり、1953～54年度には地区ガバナーを務めたことがある。

札幌で初めて会ったとき、宮脇氏はロータリー文献を日本語に翻訳する仕事に没頭していた。そして氏は1968年に死去されるまで、寝ている時間以外はほとんどロータリー文献翻訳の仕事に献身した。

一つの絵の解説にしても、あるいは一つの言葉の翻訳にしても、すべての人を満足させ、あるいはすべての人に分ってもらえるとは限らない。宮脇氏の翻訳もまたその例外ではなかった。だが氏の献身的な努力によって、ロータリー文献の日本語版刊行の基礎が築かれたのであり、氏のこの努力

は、ひいては日本のそして更には全世界のロータリーの発展と奉仕の強化に測り知れぬほど大きく貢献したといえよう。

日本国旗

国際ロータリーは全世界のロータリーの連合体である。その規模その範囲の大きさは、加盟クラブリスト、ロータリー所在国のリスト、あるいは奉仕活動の実情報告などによって明らかである。

ロータリーが全世界的な団体であることは、ロータリアン個人の属する母国の国旗を展示することによっても示されよう。各国国旗を一堂に展示した光景は壮観である。母国の国旗がはためいているのを見て感動しない人はないだろう。ましてそれが「超我の奉仕—最もよく奉仕する者、最も多く報われる」のモットーを通じて共通の目的を追求する世界諸国旗の間に展示されているのをみれば、誇りに胸がふくらむことだろう。

国際ロータリーは、ロータリー加盟諸国の国旗を集めて保存展示している。展示することそしてそれら各国の国旗が正確にデザインして作製されたものであることを国際ロータリーは誇りとしている。

日本を去る前に私は政府機関から日本国旗の正式なデザイン仕様と色見本を入手した。そしてR I事務局に帰着すると、ただちに日本国旗が他のR I加盟諸国の国旗に混じって展示されることになった。

かくて日本はロータリーへ復帰したのである！ (終)

ミーンズ氏の現住所は

Mr. George R. Means
1501 Hinman Avenue, Evanston, ILL. 60201,
U.S.A. です。

訂正 3月号本欄の42頁右段上から15行目に名古屋R C水野智彦会員のクリスチャン・ネームがJ. P. 水野とありましたが、これは原文の誤りで、正しくはJ. T. (Joshua Tomohiko) 水野です。謹んで訂正致します。